

# 連体修飾節の習得に関する研究の動向

齋藤 浩美

## 要 旨

本稿では、日本語を第二言語として学ぶ学習者の連体修飾節習得に関する研究を概観する。日本語の連体修飾節の特徴について、言語学及び国語学の観点から簡単にまとめたあと、普遍的と言われている2つの仮説に基づく習得研究を概観する。まず、被修飾名詞が修飾節に対してどのような役割を持っているかという観点から、関係節化の可能性の階層(Noun Phrase Accessibility Hierarchy)に基づく研究、続いて、主節の真ん中に埋め込まれた修飾節が難しいとする仮説に基づく研究を概観するが、日本語のこの分野の習得研究はまだ少ないため、日本語以外の言語を対象とした研究を参考にしながら、検討していく。特に、関係節化の可能性の階層に関しては、日本語を対象とした研究での結果が、普遍的と言われている仮説の検証に対してどのような役割を担うか、また、日本語の関係節を分析していくに際してはどのような問題点があるか、ということも指摘する。次に、連体修飾節の表出に関する使用頻度の研究、「の」の過剰生成の研究、意味的な観点からの研究、自然習得者の習得プロセスに関する研究、連体修飾節の理解に関する研究の順に概観する。どの研究も数が少ないため、これらの研究からまとめた結論を引き出せるわけではないが、これらを概観することによって今後どのような研究が必要とされているかを指摘したい。

【キーワード】 第二言語習得、 連体修飾節、 関係節、 関係節化の可能性の階層

## 1. はじめに

日本語のみならずどの言語でも、第二言語として外国語を学ぶ学習者にとって、関係節は習得の難しい項目のひとつであると言われている。日本語の連体修飾節も、その例外ではないと考えられる。

連体修飾節は、学習初期の段階では、それが使えなければ言いたいことが伝えられないような、コミュニケーション上必要不可欠な言語形式ではない。しかし、言語能力が発達し伝えたい内容も複雑化してくるにつれて、的確に分かりやすく伝えられるような形式の習得が必要となる。連体修飾節はそのひとつである。田丸・吉岡・木村(1993: 50)も、「太っている人 (a fat man)」、「車に乗っている人 (a man in a car)」、「死んだ魚 (a dead fish)」などを挙げ、「普通の発話で名詞修飾のために連体修飾節が要求される環境は英語の関係代名詞の場合よりはるかに多いようである。」と述べ、日本語における連体修飾節の習得の重要性を指摘している。

そこで、本稿では、第二言語としての日本語学習者の連体修飾節習得に関する研究を概観する。ただし、この分野の研究は非常に少ないため、日本語以外の言語に関して行われた研究を含めることとする。

そしてそれらを参考にしながら、日本語の連体修飾節習得研究の今後について検討していきたい。

## 2. 日本語の連体修飾節の構造的特徴

習得研究を概観するにあたり、まず、日本語の連体修飾節の特徴について簡単にまとめておきたい。ここでは、まず、本稿における連体修飾節の定義づけを行い、他の言語における類似の構造と比べた場合の構造的特徴をまとめ、最後に、日本語の連体修飾節特有の特徴について簡単にまとめる。

### 2.1 用語の定義：連体修飾節と関係節

日本語の連体修飾節に関する習得研究を見渡すと、「連体修飾節」「名詞修飾節」「関係節」などの用語が見られる。「連体修飾節」と「名詞修飾節」はほぼ同義であると考えられるが、「関係節」と「連体修飾節」とは含む構造の範囲が異なる。「連体修飾節」という用語は、日本語における、名詞を修飾する節を包括する用語であり、「関係節」は「同格節」とともにその下位項目という位置付けをするのが一般的である。「同格節」とは、修飾節内に被修飾名詞と同一指示の名詞の存在が認められない構造であり(松本 1993)、次の例(2)のようなもので

ある。

- (1) 私がきのう会った人
- (2) 地球が丸い(という)事実

(松本 1993)

例(1)は、「私がきのう(その人に)会った」という形で、被修飾名詞と同一名詞が削除されていると考えられ関係節であるが、例(2)では、「地球が丸い」という修飾節内に、「事実」と同一名詞は認められない。

ただし、研究者によっては、「広い意味での関係節」(加藤 1999)という言葉を使って「関係節」を「連体修飾節」と同義に使用している場合もあり、用語の使い方は異なっている。本稿では、「連体修飾節」を、日本語における名詞を修飾する節を包括する用語として用い、「関係節」は、修飾節内に被修飾名詞と同一指示の名詞の存在が認められる構造を表す用語として使用することとする。

## 2.2 連体修飾節の含む範囲

前節で、「連体修飾節」は日本語における名詞を修飾する節を包括する用語であると述べたが、どこまでを節と認めてその範囲にいれるかについてもまた、研究者によって異なっている。益岡(1997: 26)は、「動詞・形容詞が補足成分や修飾成分を伴って名詞を修飾する」表現を「連体節」とし、「食べるもの」のような動詞1語による修飾は、「節」には入っていない。一方、寺村(1980)は、文か動詞句かを「陳述度」という観点から区別しており、さらに寺村(1981: 89)では、これを具体的に「主体が具体的にその文(脈)から分かるということと、(中略)テンスの意識があるということ、この二点が認められるときは「節」とする」と定義づけている。そして、「きのう読んだ本」「お茶がほしい人」等は「節」であるが、「やせた人」「生きる喜び」等は「語」「句」と考えるとしている(下線筆者)。

また、奥津(1974: 9)は、「述語代用形としての「ダ」型文」が「ノ」に変わって名詞を修飾していると解釈されるものも「連体修飾文」に含めている(例3、4)。

- (3) 日曜日は休みの店
- (4) 体長が30センチのおうむ (奥津 1974)

連体修飾節の習得に関する研究では、その構造に含める範囲を明記しているものは見当たらないが、動詞1語による修飾も、連体修飾節として分析の対象としているものもある(例: Iwasaki 2000)。また、

寺村(1980, 1981)で論じられているような、陳述度によって節か句かを分けるということも行われていない。奥津(1974)の述語代用の「ノ」に関しては、連体修飾節習得研究の中で、明確に対象とされているものは筆者の知る限りでは見られない。

本稿においては、国語学的な定義を議論するものではなく、また習得研究を概観することが目的であるため、「連体修飾節」の範囲は先行研究で扱われている範囲に準じることとする。しかし、習得研究という観点からどのような構造の習得を対象として議論していくかという範囲は、今後明確にしていく必要はあるだろう。

## 2.3 日本語の関係節の典型的な構造的特徴

ここでは、日本語の連体修飾節が、ほかの言語との典型的な比較をした場合にどう特徴づけられるのかを、関係節を中心に簡単に見ていく。関係節の典型的な比較を行なう場合、1) 被修飾名詞が関係節の前に置かれる名詞前方型(pre-nominal)か、後ろに置かれる名詞後方型(post-nominal)か、2) 関係詞または関係節マーカ<sup>1</sup>があるか、3) 代名詞の残留があるか、4) 関係節内の前置詞または後置詞(以下、両者をまとめて側置詞<sup>2</sup>とする)が削除されるか、という観点から分類されることが多い。

この4つの観点から日本語の関係節の構造的特徴をまとめると、以下のようになる。

### 1) 名詞前方型か名詞後方型か

日本語の関係節は、名詞後方型であり、被修飾名詞は関係節の後に置かれる。このことは、一般的に、名詞前方型の英語等の母語話者にとって日本語の関係節は難しいという形で言及されることが多い。

また、Yamashita, Stowe & Nakayama(1993)は、名詞後方型の日本語では、修飾節が聞こえてきている間は、それが修飾節であるかどうかは聞き手には不明であり、そのあとに被修飾名詞が聞こえてきて初めて、今まで聞いていたものが修飾節であったことがわかると指摘している(Yamashita et al. 1993: 253)。しかし、寺村(1987)が、母語話者は後続部分を予測する能力を持っていると指摘しているように、母語話者の場合、様々な情報からそれが修飾節であることは予測可能であることが考えられ、被修飾名詞が聞こえてくるまで修飾節であることが全くわからないということはないだろう。ただし、初級の学習者にとっては、名詞後方型であることが、意味理解のプロセスに何らかの影響を与える可能性も

考えられる。

## 2) 関係詞・関係節マーカーの有無

日本語では、関係詞も関係節マーカーも用いられない。従って、ここからここまでが関係節であるということや、被修飾名詞と関係節の格関係を示すような、統語上の手がかりは存在しない。

## 3) 代名詞の残留があるか

関係節化を行う場合、例えば英語では、(5) のような移動があると考えられている。

(5) The man whom I wrote a letter to (him) ...



関係節内の本来あった名詞は、関係代名詞の位置に移動され、関係節内には代名詞は残留せず空所 (gap) となり、残留をさせた場合非文となる。しかし、ヘブライ語のように関係節内に代名詞が残留される言語もある (Keenan & Comrie 1977) <sup>3</sup>。

日本語は、ほとんどの場合、代名詞等<sup>4</sup>の残留は起こらないので、もとの名詞があった場所は空所となり、例 (6) のような文は非文となる。しかし、例 (7) のように、「その人の」や「自分の」の形で関係節中に残ることもある。

(6) \*私がその本を買った本

(7) 私がその人の(彼の・その) 名前を忘れてしまったお客 (久野 1973 : 150)

ただし、日本語の場合、代名詞等の残留が義務的に起こるわけではないため、基本的には残留が起こらない言語に含まれ、関係代名詞が使われず代名詞残留も起こらない「空所型」というタイプに分類される (Comrie 1989 山本・松本訳 1992)。

## 4) 関係節内の側置詞の削除

英語では、

(8) I gave a present to the man.

の the man を関係節化する場合、

(9) The man to whom I gave a present...

(Ellis 1994 : 102 下線筆者)

のように、前置詞 to が残される。しかし、日本語では、

(10) 私がその人にプレゼントをあげた。

という文の「その人」を関係節化する場合、

(11) 私がプレゼントをあげた人...

となり、後置詞にあたる格助詞「に」は、削除される。

このように、日本語の関係節は被修飾名詞と関

係節の格関係が明示されない。このことに加え、日本語は主語や目的語を省略できる言語であるため、実際に使われる関係節には、様々な解釈が可能となるものが多く存在する。たとえば、

(12) 田中さんが買った店

(コーリヤ佐貫 1999a : 278)

という表現では、「田中さんが(何かを) その店で買った」という解釈と、「田中さんがその店を買った」という解釈の両方が考えられる。松本 (1993 : 103-104) は、このような表現に関して、「聞き手(読み手)は意図された解釈を得るために言語・言語外的なコンテキストに与えられた手がかりや常識を積極的に駆使せざるを得ない」ことを指摘している。コーリヤ佐貫 (1999a : 278) は、また、

(13) 田中さんが食べた店

という例を挙げ、「田中さんが(何かを) 食べた店」という解釈は、母語話者にとっては当然であっても、「日本語学習者にとってはそのような判断は当然のものではない」と指摘しており、これらのことは、L2 学習者の意味理解を考える場合に無視できない、日本語の関係節の大きな特徴と言えるだろう。

## 2.4 日本語の連体修飾節の特徴

2.3 では、ほかの言語との類型的な比較をした場合の、日本語の関係節の言語学的特徴をまとめた。次に、日本語の連体修飾節特有の構造について簡単にまとめる。

### 2.4.1 内の関係・外の関係

被修飾名詞と連体修飾節の間に格関係があるものを、寺村 (1975) は「付加的修飾」または「内の関係」、格関係が成立するとは言えないものを、「内容補足的修飾」または「外の関係」と呼んでいる。たとえば、次の例では、例 (14) が「内の関係」、(15) が「外の関係」である。

(14) さんまを焼く男

(15) さんまを焼く匂い (例文は寺村 1975)

例 (14) は「男」と「さんまを焼く」の間に、「男がさんまを焼く」という関係が認められるが、例 (15) では、「さんまを焼く」という文の中に、「匂い」を格助詞を使って戻すことができない。

寺村 (1975) は、さらに「外の関係」を、「ふつうの内容補充」と「相対的補充」に分けている。「ふつうの内容補充」は被修飾名詞の内容を説明す

るものであり、寺村 (1980, 1981) では「内容節」と呼びなおされている。これには、例 (16) (17) (18) のようなものが含まれる。

- (16) 選挙に出る考え (発話・思考の内容)
  - (17) 一般の人が巻き込まれて負傷するという事件 (「こと」の内容)
  - (18) 赤ちゃんが笑っている写真 (知覚の内容)
- (例文 16~18 寺村 1981)

一方、「相対的補充」は次のようなものである。

- (19) 深酒をした翌日 (深酒をした日の翌日)
  - (20) 文子が座ったうしろ (文子が座った場所のうしろ)
  - (21) たばこを買ったおつり (たばこを買った代金のおつり)
- (例文 19~21 寺村 1977)

例 (19) は、「翌日」に深酒をしたわけではなく、「深酒をした日の翌日」と解釈しなければならず、(20) と (21) も、文子がうしろに座ったのでもなく、おつりでたばこを買ったのでもない。これらの表現は、「当日」と「翌日」、「前」と「うしろ」等の相対的概念を利用した連体修飾節である。

この「相対的補充」に関して、寺村 (1980) は、英語には対応する修飾形式を見出すことが一般に難しいと述べており、英語母語話者にとっては習得の難しい項目であることが予想される。

また、内容節に関しては前述の同格節と重なる部分も多いが、修飾節と被修飾名詞の間の「という」が、被修飾名詞によって、必要である場合、どちらでも可能な場合、「という」をつけられない場合の3通りがあり、このことも日本語学習者にとっては問題となってくる。

「という」が任意の場合に関しては、いくつかの研究でも考察がされているが (徳田 1989 ; 金 1989 ; 大島 1991 等)、Maynard(1993)、高野 (1997) は談話分析による考察を行っている。Maynard は、1) 修飾節が現実の発話であること、2) 修飾節が新情報であること、3) 「ドラマティック効果」、という3つの条件のうちのいずれかを満たすときに「という」が使われると述べている。「ドラマティック効果」については、高野も考察を行っているが、Maynardによると、話者が修飾節の内容のほうが被修飾名詞よりも重要であると感じたときに「という」が使われると説明されている。

この任意の「という」が、どのような時に使われどのような時に使われないのかは、日本語学習者にとっての連体修飾節の難しい点のひとつであろう。

## 2.4.2 短絡

寺村 (1976) は、

- (22) 頭のよくなる本

のような例を、「この本を読めば頭がよくなる」の「この本を読めば」の部分が消去されていると考え、「短絡」という分類をし、内の関係に含めている。しかし、内の関係は格関係の有無により定義されているものであり、

- (23) 夜ひとりでトイレに行けなくなる怖い話 (加藤 2000)
- (24) 太らないお菓子 (松本 1994)

などまで内の関係に含めるという点には疑問が残る。このような連体修飾節に関しては、最近では、意味論的、語用論的な観点からも議論されており、一致する結論はまだ得られていない (詳しくは 3.3.2 参照。また、松本 1993, 1994 ; Matsumoto 1997 ; 加藤 2000 参照)。

なお、この「短絡」に関する習得研究は、今のところ、行われたものはないようである。

## 2.4.3 非限定用法

英語の関係節では、限定用法と非限定用法が明確に区別されている。たとえば、

- (25) a. He has three children, who are linguists.
- b. He has three children who are linguists.

の例では、a は非限定用法で「彼には3人子どもがいて、その3人の子どもは言語学者だ」となるが、b は限定用法であり、「彼には言語学者をしている子どもが3人いる」となり、他の仕事をしている子どもがまだいる可能性が残る (加藤 1999 : 66)。

久野 (1973) は、日本語の連体修飾節には、限定的・非限定的の区別が外見上存在しないとし、修飾節と被修飾名詞の間の意味的關係から判断しなければならないと述べている。コーリヤ佐貫 (1999a) も同様に、限定と非限定の区別の難しさを指摘しており、たとえば、

- (26) よく働く日本人はきらわれる。

という文は、限定か非限定か二義的であり、「働き蜂日本人」というステレオタイプを考えて読めば、非限定用法になるという (コーリヤ佐貫 1999a : 279)。

また、コーリヤ佐貫 (1999a)、Collier-Sanuki

(1993)では、非限定用法の英語と日本語での機能の違いを指摘されているが、これについては、後述する(5.1.4 参照)。

以上、連体修飾節の日本語特有の特徴について見てきた。次節から、第二言語習得研究の分野での研究を概観していくが、まず、普遍的と言われている2つの仮説に基づいた研究を概観し、その後、その他の観点からの研究を概観する。

### 3. 関係節化の可能性の階層 (Noun Phrase Accessibility Hierarchy) に基づいた習得研究

本節では、関係節化の可能性の階層 (Noun Phrase Accessibility Hierarchy : 以下 NPAH) に関する研究をみる。

#### 3.1 NPAH の概略

NPAH は、Keenan & Comrie (1977) が世界の50以上の言語の類型学的な調査によって明らかにした、関係節化され易さの序列化であり、すべての言語にあてはまる普遍的な階層とされている。被修飾名詞が関係節に対してどのような機能を持っているか、という観点から分類されている。その序列は以下のとおりである。

主語 (SU) > 直接目的語 (DO) > 間接目的語 (IO) > 前置詞の目的語 (OP) > 所有格 (GEN) > 比較級の目的語 (OCOMP) <sup>5</sup>

この序列は、左にあるもの(レベルが上位のもの)ほど関係節化が容易であることを表しており、上位レベルのものほど無標、下位レベルのものほど有標であるとされている。

それぞれの例は、次のとおりである。

SU	The man who lives next door...
DO	The man whom I saw...
IO	The man to whom I gave a present...
OP	The man about whom we spoke...
GEN	The man whose wife had an accident...
OCOMP	The man that I am richer than...

(Ellis1994 : 102)

Keenan & Comrie (1977) によれば、たとえば、ある言語で間接目的語の関係節が存在すれば、その上位にある直接目的語も主語も関係節化できるとさ

れている。間接目的語だけが関係節化されるような言語は存在しないということである。どの下位レベルの関係節化まで可能かということは、言語ごとに異なる<sup>6</sup>。英語では、比較級の目的語まで関係節化が可能だが、ただし、このレベルになると、英語母語話者でも落ち着かない感じがするという<sup>7</sup> (Keenan & Comrie 1977 : 90)。また、関係節の使用頻度に関しても、この階層に沿うと考えられている<sup>8</sup>。

NPAH は、そもそも言語の類型学の観点から研究されたものであり、習得における難易度を説明しようとしているものではない。しかし、Keenan & Comrie が NPAH は理解のし易さを反映していると述べていること、また、有標の言語形式よりも無標の言語形式のほうが早く習得されるだろうという考えから、第二言語としての言語習得における難易度も NPAH に沿うのではないかと考えられ、習得研究に応用されるようになった。欧米での関係節に関する習得研究は、多くが NPAH の観点を取り入れている。

そこで、本稿では、まず欧米言語を対象に行われた NPAH の観点からの関係節に関する研究を概観し、その後、数は少ないが日本語に関する研究を概観する。

#### 3.2 NPAH の観点からの欧米言語対象の習得研究

欧米におけるNPAHの観点を取り入れた研究は、大きく2つの流れに分けられる。1つは、第二言語習得過程における関係節習得の難易度もこの階層の順序通りになるかということを検証する研究 (Gass 1979 ; Pavesi 1986 ; Sadighi 1994 等) である。もう1つは、教室でのインストラクションの効果を検証した研究である (Gass 1982 ; Eckman, Bell & Nelson 1988 ; Doughty 1991 ; Aarts & Erik 1995 ; Croteau 1995 等)。後者は、あるレベルの関係節について教えると、その上位にある(より無標の)レベルの関係節も習得されるか、ということを検証するものである<sup>9</sup>。

##### 3.2.1 第二言語習得における難易度と NPAH の関係を検証した研究

関係節習得の難易度が NPAH に沿うかを見た研究は、英語学習者を対象にしたものがほとんどであるが、研究によって、対象者のレベルや測定方法は異なっている。ここでは、英語学習者を対象とした研究、その他の言語の学習者を対象とした研究、と

いう順で見えていく。各研究の結果は、表1に簡単にまとめてある。

Gass (1979) は、成人英語学習者17名（9種類の母語）を対象に、文法性判断テスト及び2文を結合させ関係節を作らせるテスト（筆記）を行った（表1-①）。その結果、第二言語としての（以下L2）英語学習者の関係節化の難易度は、所有格の関係節以外は、NPAHの階層に沿ったものとなった。しかし、所有格の関係節化は、主語の次に誤りが少ないという、NPAHに反する結果となった<sup>10</sup>。

所有格の関係節化のこのような結果について、Gass (1979) 自身やHamilton (1995) らは、Gass のテストに含まれていた所有格の関係節が、whose + 名詞の部分の関係節内の主語か直接目的語にあたるものだけだったことを指摘している。例えば、

(27) The man whose son just came home...

(Gass 1979 下線筆者)

では、whose son がひとかたまりで came の主語になっている。所有格の関係節は、whose + 名詞の部分の関係節内の間接目的語や前置詞の目的語にもなり、関係節化の難易度がそれぞれ異なることが予想

される。Gass (1979) やHamilton (1995) らは、これが Gass (1979) において所有格の関係節化の難易度が低くなった要因である可能性を指摘している。

また、Gass (1979) は9種類の母語の学習者を対象としていながら、母語の関係節が英語と同じ名詞前方型か、日本語のような名詞後方型か、という観点は取り入れていない。しかし、母語での関係節の置かれる位置が対象言語での位置と同じか異なるかということが、関係節の習得に影響を及ぼす可能性は十分に考えられるため、分析の際には考慮に入れる必要があるだろう。

一方、Pavesi (1986) は、口頭で表出された関係節の調査をしている（表1-②）。イタリア語を母語とする英語学習者の、教室学習者と自然習得者の関係節の習得を調査した。絵を使った誘出法<sup>11</sup>を使い口頭で関係節を作らせた結果、どちらの学習者の習得順序もNPAHの階層にほぼ沿っているという結果となったが、教室環境における学習者のほうが、有標なレベルの関係節を多く表出できたことを報告している。

英語の関係節に関する理解力の調査を行った調

表1 L2 習得において NPAH を検証した研究の主なもの

	研究者	対象者 (母語)	レベル	測定方法	結果
①	Gass (1979)	英語学習者17名 (アラビア・中・仏・伊・韓・ペルシャ・葡・日・タイ)	中上～上	文法性判断 文結合	GEN 以外は、NPAH の階層に沿う結果。
②	Pavesi (1986)	英語学習者 (伊語) ①教室習得48名 ②自然習得38名	①2～7年学習 ②在英3ヶ月～25年	口頭誘出法 Hyltenstam (1984) に倣ったもの	NPAH にほぼ沿う結果。 教室内学習者のほうが、有標な関係節を多く使用。
③	Sadighi (1994)	英語学習者56名 (中・日・韓)	8～16年学習 34名 TOEFL 平均 538.5点	理解に関するテスト	母語に関わらず、GEN 及び、COMP が最も難しい。
④	Hansen-Strain & Strain (1989)	英語学習者75名 (日・中・韓・サモア・トンガ)	4レベル	聴解・口頭誘出・再話 (口頭・書き)・作文・文結合・文法性判断	GEN 以外は、NPAH の階層に沿う結果。 テストの種類によって、結果にばらつき。
⑤	Hyltenstam (1984)	スウェーデン語学習者45名 (ペルシャ・ギリシャ・スペイン・フィンランド)	上級	口頭誘出法 (絵を使用)	GEN 以外は NPAH の階層に沿う結果。GEN は難易度が高かった。
⑥	Tarallo & Myhill (1983)	独語・中国語・葡語・日本語・ペルシャ語学習者 (母語: 英語)	大学で1～2年	文法性判断	名詞後方型の言語では、SU より DO のほうが良い結果。

査としては、Sadighi (1994) が、中国語、日本語、韓国語母語（どの言語も関係節が名詞後方型）の英語学習者を対象に実験を行っている（表1-③）。その結果、所有格及び比較の目的語の関係節が最も難しいという結果を得ている。

ただし、これらの研究は、文法性判断テストや口頭誘出タスク、理解の測定など、異なる実験方法を用いているため、単純な比較はできないことには留意する必要があるだろう。

その点で、Hansen-Strain & Strain (1989) による複数の種類のテスト結果を比較した研究の結果は興味深い（表1-④）。Hansen-Strain & Strainは、日本語、中国語、韓国語、サモア語、トンガ語を母語とする英語学習者を対象に7種類の実験を行った。日本語、中国語、韓国語は名詞後方型であり、サモア語とトンガ語は名詞前方型である。行った実験は、①聴解、②絵による口頭誘出法（Hyltenstam 1984に倣ったもの）、③口頭での再話（retelling）<sup>12</sup>、④筆記での再話、⑤作文、⑥文結合テスト、⑦文法性判断テストの7種類であった。その結果、①から③の実験（聴解及び口頭産出）では母語グループ間の成績に有意差が見られたが、④から⑦の実験（筆記）では有意差がなかった。母語グループによる成績の差が最も大きかった実験は聴解テストで、最も小さかった実験は文法性判断テストであった。

NPAHに関しては、実験方法に関わらず、ほぼ階層に沿った結果となっている。ただ、ここでも所有格の関係節の難易度はNPAHの階層のとおりにはならなかった。加えて、母語グループ間による違いが見られ、文結合タスクでは、所有格の結果のみ、母語グループ間の差が有意となった。また、文法性判断テストと口頭誘出法でも、アジア言語を母語とする学習者のほうが、ポリネシア言語のグループより、所有格の関係節化において良い結果を得ていた。この母語グループによる違いに関しては、Hansen-Strain & Strain は、アジア言語グループが関係節化に関する明示的なインストラクションを受けていたことを要因として指摘している。

一方、③から⑤の再話及び作文は、関係節の使用頻度を調べる実験であるが、各階層の関係節の使用頻度も、ほぼ NPAH に沿った結果となった。しかし、間接目的語の関係節の使用頻度は、前置詞の目的語のものより低く、ほとんど使われていなかった。

ここまで見てきた研究は、英語学習者を対象としたものであったが、英語以外を対象としたものでは、Hyltenstam (1984) のスウェーデン語学習者を対象とした研究で、所有格の関係節化が最も難易度が高いという結果が出ている（表1-⑤）。Hyltenstam は、ペルシャ語、ギリシャ語、スペイン語、フィンランド語を母語とするスウェーデン語学習者に対して、絵を使った口頭誘出法で実験を行っている。所有格以外の関係節化に関しては、NPAH に沿った結果となっている。

また、Tarallo & Myhill (1983) は、5種類の言語（ドイツ語、ポルトガル語、ペルシャ語、中国語、日本語）を学ぶ英語母語話者を対象に、文法性判断テストを行った（表1-⑥）。名詞後方型である中国語と日本語の学習者を含んでおり、名詞前方型と後方型を比較した唯一の研究と言える。その結果、名詞前方型の言語では、被修飾名詞が主語の関係節が最も正しく判断されたが、名詞後方型の日本語と中国語では、被修飾語が直接目的語の関係節が最も正しく判断された。

Tarallo & Myhill は、このような結果となった要因を、関係節内の空所（被修飾名詞が本来あった位置）と被修飾名詞との距離にあるとし、両者の距離が遠いほうが近い場合より関係節の難易度が高くなると説明している。例えば、英語の

(28) The man who (he) came here...

(29) The man whom I saw (him) ...

では、主語の関係節である (28) のほうが、被修飾名詞と空所の距離が近い。つまり、移動の距離が近いことになる。また、反対に日本語では、

(30) (その人が) 私を見た人...

(31) 私が (その人を) 見た人...

となり、直接目的語の関係節である (31) のほうが、被修飾名詞と空所の距離が近い。Tarallo & Myhill は、このために、日本語や中国語のような名詞後方型の言語では、直接目的語の関係節化のほうが、主語の関係節化よりも易しくなると述べている。つまり、Tarallo & Myhill は、習得の難易度がこのようになることを、NPAH からではなく、名詞句の移動距離の観点から説明を試みている。

Tarallo & Myhill と同じような立場をとっているのが、Hawkins (1989)である。Hawkins は、英語を母語とするフランス語学習者を対象に、関係代名詞を書き込むクローズテストを行った。フランス語の

関係節では、直接目的語が被修飾名詞になる場合、関係節内の主語と動詞を倒置させることも可能であるため、二通りの語順が存在する。Hawkins の実験では、倒置が含まれる関係節は難易度が高いという結果となった。Hawkins は、NPAH が習得の難易度を決定するのであれば、語順が二通りであろうと、直接目的語の関係節化である限り、主語の関係節化の次に易しいはずであるとし、この結果を NPAH からではなく、文の構造の観点から説明している。

以上、L2 習得における難易度と NPAH の関係に関する研究を概観してきた。L2 習得の難易度は NPAH の階層にほぼ沿っているという結果を報告しているものが多いが、一致した結論には至っていない。

さらに、NPAH にほぼ沿っているという結果となっている研究でも、所有格の関係節化は NPAH に沿った結果にはなっていない。この点に関して、Jones (1991,1993) は、-GEN (非所有格) と +GEN (所有格) のふたつの階層に分けることを提案している。ふたつの階層は次のような順序になるが、Ellis (1994) も、この Jones の階層により多くの研究で得られた結果を説明できると述べている。ただし、Jones 自身の実験では、この提案を支持するような結果を得ることはできていない。

#### -GEN (非所有格) の階層

- SU: The man who came ...
- DO: The man (whom) I saw ...
- IO: The man (whom) I gave the book to ...
- OP: The man (whom) I looked at ...
- OC: The man (whom) I am bigger than ...

#### +GEN (所有格) の階層

- SU: The man whose wife came ...
- DO: The man whose wife I saw ...
- IO: The man whose wife I gave the book to ..
- OP: The man whose wife I looked at ...
- OC: The man whose wife I am bigger than ...

Gass (1979 : 341) は、「NPAH は普遍的なものであり、その L2 習得への影響も大きい、言語間の特徴の違いによる修正も可能だろう」(筆者訳)と指摘しているが、言語間の違いのみならず、所有格の関係節化の問題、母語やインプット、インストラ

クションの違い、さらに実験方法による違いも考慮に入れた、さらなる研究が必要であろう。また、Tarallo & Myhill (1983) と Hawkins (1989) らの主張に関しては、特に、名詞後方型の言語を中心とした、英語以外の言語での多くの研究の結果が待たれる。

#### 3.2.2 インストラクションの効果を検証した研究

インストラクションの効果を検証した研究は、ほとんどが、文結合テスト等による事前テストと事後テストの結果を比較する形で、行われている。

Gass (1982) は、成人の ESL 学習者を2つのグループに分けて、インストラクションを行った(表2-①)。1つのグループには、前置詞の目的語の関係節化だけのインストラクションを実施、もう1つのグループには、統制群として、易しいレベルから順々に様々なレベルの関係節のインストラクション(伝統的な指導法)を実施し、その両者に、事前テストと事後テストとして、すべての階層の関係節を含む文結合テストと文法性判断テストを行った。その結果、前置詞の目的語の関係節化に関するインストラクションを受けたグループは、統制群よりもよい成績を得たばかりでなく、その上位階層の関係節化においてもインストラクションの効果が見られた。この結果から Gass は、ある言語形式に関して、難易度の高い構造のほうを最初に教えるほうが、易しい構造のものから順々に教えていく教え方より、効果的であることを提案している。

さらに、Eckman et al. (1988) は、学習者を4つのグループに分けて調査を行なった(表2-②)。それぞれのグループには、①主語の関係節化のみ、②直接目的語の関係節化のみ、③前置詞の目的語の関係節化のみ、のインストラクションが行なわれ、統制群には、関係節とは関係のない項目のインストラクションが行なわれた。事前テストと事後テストは、主語、直接目的語、前置詞の目的語の関係節化に関する文結合テストが行なわれた<sup>13</sup>。事前テストの結果は、どのグループも、NPAH に沿った結果となった。事後テストの結果は、前置詞の目的語のインストラクションを受けたグループが最も高い得点を得、直接目的語、主語のグループがそれに次いだ。Eckman et al. は、有標の項目で習得されたルールは、それよりも無標の項目に対して応用されるが、逆は起こらないと結論づけている。

Gass (1982) と Eckman et al. (1988) の結果は、インストラクションを受けたルールの応用が無標の方向

のみ、という結果となっているが、異なる結果が出ている研究もある。

Doughty (1991) は、20 人の E S L 学習者を 3 つのグループに分け、前置詞の目的語の関係節化のみについて 2 つのグループに異なる教授（形式重視、意味重視）を行った（表 2-③）。統制群には教授は行わず、有標の関係節のインプットのみをおこなった。事前テストと事後テストは、すべてのレベルの関係節を含むテストが筆記（文法性判断テスト、文結合テスト、文完成テスト）と口頭（絵を使用した 2 種類の誘出法）で行なわれた。インストラクションを受けた 2 つのグループは事前テストと事後テストの結果に有意な差があったが、2 つの教授法の間には有意差はなかった。また、インストラクション・グループほどではないが、統制群の事前・事後テストの結果にも有意差が見られた。さらに、インストラクションを受けたグループでは、前置詞の目的語の関係節化が習得されると、それよりも無標の

階層の関係節化も習得される傾向があることが明らかになったが、それよりも有標な関係節にも効果が見られた。

この結果から、Doughty は、無標の項目へのインストラクションでは無標の項目への応用しか起こらないが、有標の項目へインストラクションを行うと、他の有標の項目への応用も起こる可能性がある結論づけている。

Hamilton (1994, 1995) も、Gass や Eckman et al. が主張したような、あるレベルの関係節化へのインストラクションの他のレベルへの応用が一方のみという結論には、異を唱えている。さらに、Hamilton は、Gass の結果も、よく見てみると、インストラクションの効果は、下位の階層にも現れていることを指摘している。

英語以外の言語の関係節に関する研究では、Croteau (1995) が、英語を母語とするイタリア語学習者を対象に調査を行っている（表 2-④）。

表 2 L2 習得における関係節教授研究の主なもの

	研究者	対象者（母語）	レベル	インストラクション	測定方法	結果
①	Gass (1982)	英語学習者13名 (アラビア・ファ ルシー・伊・ 露・西・日本)	中級下	3日間 ①OPのみ ②すべてのレベル	文結合 文法性判断	OPグループは、その上位の関係節にもインストラクションの効果あり。
②	Eckman et al. (1988)	英語学習者36名 (アラビア・ 西・韓国・日 本)	中級下～ 中級	1コマ ①SUのみ ②DOのみ ③OPのみ ④統制群	文結合 (SU, DO, OPのみ)	OPのみのグループが高得点。
③	Doughty (1991)	英語学習者20名 (仏・伊・日・ 中・露・西・トル コ)	中級下～ 中級 (平均 TOEFL 424点)	①OPのみ (意味重視) ②OPのみ (形式重視) ③統制群 (インプ ットのみ)	筆記テスト 文結合・ 完成・文 法性判断 (2種類) 口頭誘出法 (2種類)	①②どちらも、インストラクションの効果あり。上位レベルの関係節にも効果あり。
④	Croteau (1995)	イタリア語学習 者 (英語)	大学のイ タリア語 クラス	宿題で実施 ①DOのみ ②OPのみ ③GENのみ	文結合 (SU, DO, OP, GEN)	DOグループ SU, DOに効果 OPグループ DO, OPに効果 GENグループ GENのみ効果
⑤	Aarts & Erik (1995)	英語学習者96名/ (ドイツ語)	大学での 英語学習1 年目	45分×3回 英語の関係節の作り 方に関する講義。 統制群無し。	文結合 (事後テ ストはイン ストラクシ ョンの3ヶ月 後)	インストラクシ ョンの効果あり。 DOよりSUの誤り が多い。

Croteau は、学習者を3つのグループに分け、それぞれのグループに、直接目的語のみ、前置詞の目的語のみ、所有格のみの関係節化に関するインストラクションを行った。文結合テストによる事前テストと事後テストは、主語を加えた4つのレベルに関して行われた。その結果、直接目的語のインストラクションを受けたグループは、主語と直接目的語に効果が見られ、前置詞の目的語のインストラクションのグループでは、直接目的語と前置詞の目的語に効果が見られた。イタリア語でも、ある階層の関係節のインストラクションにより、それより上位の階層の関係節も習得されることが示唆された。しかし、同時に、前置詞の目的語のインストラクションのグループでは、主語の階層には効果が見られないという結果も得られた。さらに、所有格のインストラクションのグループでは、所有格のみにしか効果が見られず、主語と直接目的語の関係節化では、反対に誤りが増えた。

所有格のグループの結果に関しては、イタリア語の関係節化のルールから説明されている。イタリア語では、所有格の関係節化ルールは、ほかのレベルのルールと大きく異なっていて最も難しい<sup>14</sup>。そのルールのみでの学習をした学習者は、学んだルールをそれよりも無標の関係節にも適用してしまい、事前テストよりも誤りが増えてしまったと説明されている。ただし、これは、関係代名詞に関わる問題であるため、関係節化自体は行なわれているが関係代名詞にだけ誤りがある場合に、関係節化ができていないとみなすかどうか、にもよるであろう。

最後に、ここまで挙げてきたような、インストラクションの効果がより無標の階層に及ぶかという観点からではないが、インストラクションの効果を見た研究をひとつ挙げておく(表2-⑤)。Aarts & Erik(1995)は、ドイツ語を母語とする英語学習者にインストラクションを行い、文結合テストによる事前テストと事後テストを行った。行われたインストラクションは、英語の関係節に関する全般的な教授であった。その結果、事後テスト(3ヶ月後)では大幅に誤りが減少し、インストラクションによって関係節の習得が促進されたと言えるだろうと、結論づけられているが、統制群を設けていないため、3ヶ月の間にインプットがあった等ほかの要因が影響した可能性もあることも、筆者らは認めている。また、主語と直接目的語以外に関しては NPAH の

階層に沿った結果となったが、主語より直接目的語のほうが関係節化が正しく行なわれたという、NPAH に反する結果となった。しかし、その原因については考察されていない。

以上のように、英語及びイタリア語に関する研究では、ある階層の関係節が習得されると、その上位階層の関係節も習得されることが明らかにされている。しかし、研究によっては、階層の一部分に逆転の現象が見られたり、インストラクションが行なわれたレベルのものよりも有標の関係節も習得される現象が見られたりということも観察され、やはりまだ一致した結論に至ったとは言えない。また、対象とした言語特有の特徴の影響も観察されている。

これらの研究は、ある言語形式の中で何が難しく何が易しいのかを明らかにした上で、さらに、易しいものからコツコツと教えていくのか、或いは効果的な近道があるのかを明らかにしようとするものであり、教育的な意義の非常に多い研究だと考えられる。

ただし、これらの研究は対象となった学習者のレベルにばらつきがあり、さらにすべての研究において、事前テストの段階で学習者には関係節化の知識があった。したがって、ある程度関係節化の基礎知識がある学習者に対するインストラクションの効果を見たものである。Gass (1982) は、研究で得られた結果から、新しいシラバスデザインを提案したいと述べているが、そのためには、Ellis (1994) でも指摘されているように、関係節化の知識が全くない学習者への導入段階で、有標性の高いレベルの関係節から導入したら、より無標の関係節も同時に習得されるかという調査を行う必要があるだろう。

### 3.3 NPAH の観点からの日本語の連体修飾節の習得研究

NPAH に関しては、日本語を対象にした研究だけでなく、名詞後方型の言語を対象にした研究がまだ非常に少ない。しかし、普遍的と主張されているからには、名詞後方型の言語での研究がもっと行われなければならない。特に、何が関係節の難易度の順序を決める要因かという理論的な説明をしていくために果たす役割は大きい。

そこで、本節では、行われた研究の結果を見る前に、難易度の順序の理論的説明をめぐる議論を紹介する。

### 3.3.1 関係節の難易度の理論的説明に関する議論

Keenan & Comrie(1977) は、NPAH の階層のような順序になる要因を、理解しやすさという認知的な面から説明している。主語の関係節化が最も理解し易く、階層が下がるほど理解しにくくなるということであり、この説明が正しければ、名詞前方型・後方型の違いだけでなく、関係節にどのような特徴のある言語で調査をしても同じ結果になると予想される。

次に、前述のとおり、Tarallo & Myhill (1983)や Hawkins (1989)は、難易度を定める要因は被修飾名詞との文法関係ではなく、被修飾名詞と空所の距離が難易度に影響しているとしている。この説明からは、Tarallo & Myhill が主張するとおり、名詞後方型の日本語では、主語よりも直接目的語の関係節化のほうが易しくなることが予想される。

また、同じように構造的な面からの説明だが、O'grady (1999, 2000)、O'grady, Yamashita, Lee, Choo & Cho (2000)、Wolfe-Quintero (1992) は、空所の埋め込みの深さという観点から説明している。

英語では、主語の関係節は、

(32) the truck that [<sub>S</sub> pushed the car ]

となり、直接目的語の関係節は、

(33) the truck that [<sub>S</sub> the car [<sub>VP</sub> pushed \_\_\_]]

となる(例文 O'grady et al. 2000)。(32)のほうが、空所の埋め込みが深くなっており、移動操作の際に飛び越える句の数が多い。O'grady らは、このために、(32) よりも (33) の関係節化のほうが難しいとし、被修飾名詞と空所の構造的な距離が難易度を定める要因となるとしている。

日本語に関しては、O'grady (2000) によれば、主語の関係節化は、

(34) [<sub>S</sub> 男の人を見ている] 女の人

直接目的語の関係節化は、

(35) [<sub>S</sub>男の人が[<sub>VP</sub> 見ている]] 女の人

となり、英語と同様に主語の関係節化のほうが易しいことになる(例文 O'grady et al. 2000 原典ではローマ字書き)。

このことから、O'grady (2000)、O'grady et al. (2000) は、O'grady らの仮説と Tarallo & Myhill らの仮説は、英語ではどちらも主語の関係節化が難易度が低いという予測をすることになるが、日本語のような名詞後方型の言語では異なる結果が予想されることになる指摘している。

以上の3通りの議論をまとめると、日本語での習得研究において、主語のほうが易しいという結果が出れば、その要因は、Keenan & Comrie の言う NPAH の認知的な理解しやすさ、または、O'grady らの言う埋め込みの深さが要因である可能性を指示することになる。直接目的語のほうが易しいという結果となれば、移動の距離が要因という可能性を指示することになる。英語ではどの要因であったとしても、主語の関係節化のほうが直接目的語の関係節化よりも易しくなり、英語における習得研究からはどれが要因であるかを検証することはできない。日本語における研究を行うことは、普遍的な仮説の構築に対して重要な役割を担うことになると言えるだろう。

### 3.3.2 井上 (1976) による「格の順位」

日本語での NPAH については、井上 (1976 : 187) が、側置詞の目的語を一括して取り扱うことは問題であるとして、次のような日本語の「格の順位」を提案している。

主格>直接目的格>間接目的格>位置格「に」>位置格「を」>目標格「に」または「へ」>位置格「で」>助格「で」>基準格「で」>奪格>所有格>基点格>随格>理由格>比較格

(井上 1976 : 187)

この順位は、NPAHが多くの言語の調査から含意的普遍性を見出し提案されているのに対し、関係節化できるかどうかの制限をもとにつけられた順位である。単文からだけでなく、文主語および関係節からの関係節化<sup>15</sup>が可能であるかという制限も合わせて順位をつけている。厳密にはNPAHとは種類の異なる階層である。この階層では、右に行くほど関係節化の制限が厳しくなる<sup>16</sup>。

それぞれの例は、以下のとおりである。比較格に関しては、井上は、日本語では関係節化されないとしている。

主格	昨日来た人 (その人が昨日来た)
直接目的格	私が見た映画 (私はその映画を見た)
間接目的格	彼が本をあげた友だち (彼はその友だちに本をあげた)

位置格「に」	私が <u>住</u> んでいる家 (私はその家 <u>に</u> 住んでいる)
位置格「を」	私が <u>出</u> た大学 (私はその大学 <u>を</u> 出た)
目標格「に」「へ」	昨日 <u>行</u> ったレストラン (昨日そのレストラン <u>へ</u> 行っ <u>た</u> )
位置格「で」	友だちが働 <u>い</u> ている会社 (友だちはその会社 <u>で</u> 働いている)
助格「で」	バツハが楽譜を <u>書</u> いたペン (バツハはそのペン <u>で</u> 楽譜を <u>書</u> いた)
基準格「で」	合否を判断した基準 (その基準 <u>で</u> 合否を判断した)
奪格	犯人が金 <u>を</u> 盗んだ銀行 (犯人はその銀行 <u>から</u> 金 <u>を</u> 盗んだ)
所有格	奥さんが事故に <u>あ</u> った人 (その人 <u>の</u> 奥さんが事故に <u>あ</u> った)
基点格	私が <u>そ</u> こから大学に通った下宿 (私はその下宿 <u>から</u> 大学に通った)
随格	私が <u>結</u> 婚した人 (私はその人 <u>と</u> 結婚した)
理由格	会社を <u>や</u> める理由 (その理由 <u>で</u> 会社を <u>や</u> める)

たとえば、随格「と」は、「私は友だちと京都へ行った」の文の「友だち」を関係節化する場合、「私が京都へ行った友だち」という文になり非文となってしまうので、「私がいっしょに京都へ行った友達」のように、「いっしょに」を添加する必要があり、その意味で関係節化しにくいと言える<sup>17</sup>。

日本語の連体修飾節に関する NPAH の観点からの習得研究は、それほど多くはないが、少ないながらも、連体修飾節習得研究は被修飾名詞と修飾節の関係を中心に行われている。しかし、欧米言語で盛んに行なわれたような、インストラクションの効果を見る研究は、今のところ報告されていない。

### 3.3.3 実験による調査

実験による調査としては、前述したとおり、Tarallo & Myhill (1983) が、英語を母語とする日本語学習者も調査の対象としており、文法性判断テストの結果から、関係節が被修飾名詞の前に来る日本語等の言語では、直接目的語の関係節のほうが、主語の関係節よりも易しいと結論づけている。

産出に関する実験による調査は、今のところ窪田 (1997) 及び坂本・窪田 (2000) 以外見当たらない。

窪田 (1997) は、上級日本語学習者 19 名 (英語、中国語、インドネシア語母語話者) に対して、「外の関係」も含めた文結合テストを行っている。テストでは、母語に関わらず難易度が低いものが、主語と、動作動詞の直接目的語 (ヲ) であること、また、母語に関わらず難易度が高いものが、原因・理由 (デ)、手段・方法 (デ)、「外の関係」であることが報告されている。しかし、主語および動作動詞の直接目的語 (ヲ) に関しては、英語母語話者、インドネシア語母語話者では、直接目的語のほうが正答率が高く、中国語母語話者のみ主語のほうが正答率が高くなっている。これは、Tarallo & Myhill の調査での英語母語話者の結果 (直接目的語の関係節化のほうが易しい) に近い結果といえよう。

坂本・窪田 (2000) は、窪田 (1997) のデータを細かく再分析している。

文結合テストにおいては、二つの文から一つの文を作る際に、次の例 (36) の b と c のように、前の文と後ろの文のどちらの名詞を被修飾名詞にするかによって、二通りの文が可能になる。

(36) a. 私は友達に花をあげた。友達は京都から来た人だ。

(36) b. 私が花をあげた友達は京都から来た人だ。

(36) c. 私は京都から来た友達に花をあげた。

(坂本・窪田 2000 : 116)

例 (36) では、b が間接目的語の関係節化であり、c は主語の関係節化である。

坂本・窪田は、文結合テストで作られた文を、二つの文の名詞のうち、どちらを被修飾名詞としたかという観点から分析した。その結果、主語、直接目的語、間接目的語の関係節化の優位性は支持される結果となったが、主語と直接目的語の順序に関しては、どちらが多いかという明らかな結果は得られなかった。

しかし、理解に関する実験を行った Kanno (2000) では、主語が関係節化された文のほうが、直接目的語が関係節化された文よりも理解されやすいという結果が得られている。Kanno は、3つのレベルの 94 名の英語母語話者と 4 名の日本語母語話者を対象に、実験を行った。関係節中の空所の位置と被修飾名詞の距離が大きく異なる、主語と直接目的語が関係節化された文のみを調査文とし、文を聞かせて正しい絵を選ばせた。また、調査文には、「女の人を見て

いる男の人」のように、関係節中の名詞も被修飾名詞も有生性を持つタイプの文と、「そばを食べている男の人」のように、どちらか一方の名詞のみが有生性を持つタイプの文が含まれている。後者のタイプでは、意味解釈に有生性という手がかりがあるが、前者のタイプでは、「女の人を見ている男の人」か「女の人が見ている男の人」かを、助詞を手がかりに判断する必要がある。

実験の結果、どちらのタイプの文でも、主語が関係節化された文のほうが理解しやすいという結果が得られた。また、有生性の手がかりがない場合、目的語の関係節化を、主語の関係節化に解釈する誤りのほうが、その逆よりも多かった。このことから、目的語の関係節化の理解のほうが困難であること、また、学習者は、文の理解に、助詞を手がかりとして用いていないことが報告されている。

### 3.3.4 使用頻度の調査

上記の研究以外に、日本語に関して報告されている研究は、使用の頻度を見ているものである。

鹿浦 (1991) は、日本語を学ぶ留学生の5つのレベルのクラス(初級から上級下程度)を対象に、期末試験として行われた口頭試験を調査し、そこで使われた連体修飾節を分析した。NPAHを検証しているものではないが、被修飾名詞と連体修飾節の格関係を中心に調べている。一番レベルの低いクラスでも、連体修飾節は既に学習済みであったが、レベルの低い2つのクラスでは連体修飾節は全く使われなかったと報告されている。その1つ上のクラスで始めて少数の連体修飾節が使われたが、使われた3例は、すべて被修飾名詞が主語のもので、さらに1つ上のクラスで始めて直接目的語と「に格」が現れている。この結果から、鹿浦は、主語、直接目的語、「に格」、「で格」の順に習得が進むと結論付けている。しかし、表出された連体修飾節の数が全体で12例と非常に少なく、「に格」「で格」に関しては3例しかないため、習得順序を結論付けることは難しいだろう。

川村 (1996) は、トルコ人の日本語学習者の作文を調査した。トルコ国内の大学で日本語を専攻し約300時間の学習を終えた18名を対象に、5ヶ月の間に書かれた4編の作文を分析している。川村は、使われた連体修飾節を、「被修飾名詞が主格を示す」「被修飾名詞が対格を示す」「主格・対格以外の、場所・相手・手段などを示すもの、及び外の関係

の3つのカテゴリーに分類した。その結果、上位・中位・下位群すべてで、「主格」のものが最も多く使われ、「対格」がそれに次ぐ、という結果となった。また、下位・中位群では、「主格」の使用割合が突出しているが、上位群では「主格」と「対格」の差が縮まっていくということを報告している。この結果から、「主格」つまり被修飾名詞が連体修飾節の主語を表すものが最も早くから多く使われ、「対格」つまり直接目的語のものがそれに遅れて使われるようになる、ということが言える。

ただし、Keenan (1975) は、書かれている内容が複雑で難しい文章と内容が易しい文章を比べ<sup>18</sup>、易しい内容ではNPAHでの上位の階層にある(無標の)関係節の頻度が非常に高いが、難しい内容になっていくと有標な階層の関係節の使用が増えていくことを報告しており、川村 (1996) の結果は、このことを反映している可能性もある。

小熊他 (1998) は、小学生から大学生までの日本人と、第二言語としての日本語学習者、両者合わせて520名の作文に使われた連体修飾節の調査を行っている。作文に使われた連体修飾節を「内の関係」「外の関係」のに分類し、さらに「内の関係」のものは、被修飾名詞が連体修飾節に対してどのような関係にあるかという分析を行った。その結果、日本人の作文での「内の関係」のものでは、被修飾名詞が「主体」「対象」「時」の関係にあるものが多かったことを報告している。また、日本語学習者(40名)に関しては、「主体」「対象」「相手」が内の関係の連体修飾節の65%を占めていたと述べている。「主体」「対象」は、NPAHでの主語、直接目的語にあたるため、NPAHにそった結果であると言える。

また、窪田 (1997) は、日本語の初級学習者(英語、中国語、インドネシア語を母語とする17名)、上級学習者(英語を母語とする4名)、日本人(20名)の作文での関係節を分析した。その結果、日本人の作文で使われた関係節は、主語(ガ)、「外の関係」、動作動詞の直接目的語(ヲ)の順で多かったこと、学習者のグループでは初級、上級ともに、主語(ガ)、動作動詞の直接目的語(ヲ)、状態動詞の直接目的語(ガ)、「外の関係」の順で多かったことを報告している。

使用頻度を見たこれらの研究では、被修飾名詞が主語と直接目的語の関係にある連体修飾節が使われ

易いという結果は一致している。しかし、NPAH の階層の上位のものもともと関係節化されて使われる頻度が高いものであり、下位にあるものは頻度が低いものであるため、単純に使用頻度を反映している可能性もある。L2 としての習得しやすさを見るためには、連体修飾節を産出し始めた時期からの縦断的な観察が必要であろう。もちろん、縦断的なデータであっても、単にもともとの使用頻度を反映している可能性はあることは、データ分析に関して忘れてはならないことであろう。

齋藤 (2001) は、3名の初級学習者 (ロシア語、テルグ語、マラティ語母語話者) の連体修飾節の口頭での表出に関する縦断的な観察を行った。誘出法を用いず、教師と学習者及び学習者間のインタラクションにおける連体修飾節の使用をデータとした。その結果、3名を通じた傾向としては、主語及び直接目的語の連体修飾節が早い時期に使われ始めることがわかった。しかし、それ以外の修飾節 (特に場所を示すもの) も、少数であるが早い時期から使われていた。また、全員を通じて被修飾名詞が間接目的語の連体修飾節は使われていなかった。この結果は、前述の Hansen-Strain & Strain (1989) の英語に関する調査での、産出における頻度に関しては間接目的語が関係節化されたものは非常に少ないという結果とも一致する。

### 3.3.5 NPAH の観点からの日本語の連体修飾節習得研究に関する問題点

ここまで述べた研究では、表出の頻度に関しては、L2 日本語学習者においても、被修飾名詞が主語及び直接目的語の連体修飾節が使われやすいことが明らかになったが、実験により難易度を調査した研究では、主語と直接目的語が NPAH の階層どおりになるかどうかは、結果が分かれており、全体としては一致した結果は得られていないと言える。前述のとおり、日本語においてどのような結果が出るかが、関係節習得の難易度を定める普遍的な要因の研究に大きく貢献する可能性もあり、更なる研究が必要とされている。

また、間接目的語の関係節化に関しては、使用頻度を調べた研究の結果は習得の難易度を調べようとした実験の結果とは異なるものになっている。使用頻度に関しては、母語話者の使用頻度の調査がまず必要であろう。

ただし、日本語の連体修飾節を NPAH に沿って

分類していく場合には、いくつかの問題点もある。

関係代名詞がなく格助詞も削除される日本語では、「私を買った本」(本を買った)も、「住んでいる国」(国に住んでいる)も、「買い物をした店」(店で買い物をした)も、「乗った電車」(電車に乗った)も、同じ形になる。関係節化される以前の叙述文に戻して分類していく以外に、分類の手がかりはないことになるが、トピック・コメント言語である日本語では、主題をどう扱っていくかということが問題になる。加藤 (2000 : 72) は、

(37) 緑が多い町

のような例を挙げ、「その町が緑が多い」でも非文とは言えないが、「その町は緑が多い」という主題文のほうが「自然で中立的な無標の解釈といえる」と述べている。しかし、主題を主語に分類することには問題がある。また、井上 (1976) は、

(38) 鼻が長い象

(39) 物価が高い東京

という例を挙げ、(38) は「象は鼻が長い」という主題文、(39) は「東京は物価が高い」という主題文の、主題の名詞句の関係節化だとしている。しかし、これらの関係節化が、関係節化の「格の順位」のどこに入れられるかは述べられていない。

あるいは、このように自然な叙述文に戻して考えるのではなく、修飾節と被修飾名詞の関係を考え、「緑が多い町」は位置格「に」の関係節化(「その町に緑が多い」)、「鼻が長い象」は所有格「の」の関係節化(「象の鼻が長い」)と考える考え方もあるだろう。Keenan & Comrie (1977) も、トピック言語におけるトピックをどう扱うかを問題点として指摘しており、今後考えていかなければならない問題である。

また、次のような問題もある。

(40) 私が愛している人

(41) 私が惚れている人

では、(40) は「私的那个人を愛している」となり、直接目的語の関係節化である。一方、(41) は「私那个人に惚れている」のように二格となるが、間接目的語に分類されるのだろうか。あるいは、二格であるが、直接目的語とするのであろうか。

もともと Keenan & Comrie (1977 : 64) は、「主語を関係節化する」ことを、「被修飾名詞が関係節の動詞の主語として機能する」(“function as the subject of the main verb of the restricting clause”) ことで

あるという表現を使っている（和訳及び下線筆者）。この「～として機能する」をどう解釈していくかにより、分類の仕方も変わってくるだろう。また、角田（1991）は、文法分析に際しては、格のレベルと文法機能（主語、目的語等）のレベルを混同してはいけいと述べている。NPAHに関する研究を進めていくためには、まず分類基準をはっきりと決め、また少なくとも、どのような基準を使ったかを明記することが必要であろう。

また、前述した「短絡」の連体修飾節や、

(42) 競馬で勝った金 (白川 1986)

のような例は日本語には多くある。(42)は、「競馬で勝って儲けた金」のことで、「金を勝った」わけではない。白川は、このような連体修飾節は、言語外知識による推論から成り立っていると説明している。Matsumoto (1997: 3-4) は、「英語では被修飾名詞と関係節の意味的な関係が、関係節の構造によって厳格に決められる」が、日本語では、「被修飾名詞と修飾節は、統語的な分析で分析できる以上に複雑である」（筆者訳）と述べ、欧米語での研究に比べて格関係を中心に分析していただくだけでは問題であることを指摘している。

これらのことを踏まえたうえで、日本語の連体修飾節における「被修飾名詞と修飾節の関係」というものを捉えなおしていくこと、また、欧米での研究のような、インストラクションを絡めた研究を行なうことが、今後は必要だと言えるだろう。

## 4. 知覚難易度仮説の観点からの習得研究

### 4.1 知覚難易度仮説

NPAH に次いで、関係節習得研究によく使われる仮説が、知覚難易度仮説 (Perceptual Difficulty Hypothesis 和訳筆者、以下 PDH) である。

Kuno(1974)は、主節の真ん中に埋め込まれる関係節 (center-embedded relative clause) が最も知覚的に難しいだろうと述べている。たとえば、英語の、

(43) I know the man who came here today.

という文では、関係節 who came here today は、文末に来ており、I know the man. という主節の真ん中には埋め込まれていない。しかし、

(44) The man who came here today is my friend.

では、関係節 who came here today が、The man is my friend. という主節の真ん中に埋め込まれている。

(43) は被修飾名詞が主節の目的語になっている例

であり、(44) は被修飾名詞が主節の主語になっている例である。従って、英語のような名詞前方型の言語では、被修飾名詞が主節の目的語になる文のほうが、被修飾名詞が主節の主語になる文よりも易しいことになる。

反対に日本語では、次のようになる。

(45) 私は今日来た人を知っています。

(46) 今日来た人は私の友達です。

(45) では、「私は人を知っています。」という主節の真ん中に「今日来た」という関係節が埋め込まれるが、(46) では「今日来た」は文頭への埋め込みになっている。従って、日本語では、被修飾名詞が主節の主語になる文のほうが、被修飾名詞が主節の目的語になる文よりも易しいことになる。

従って、この仮説によれば、英語では、主節の目的語が関係節化されるほうが難易度が低く、日本語では、主節の主語が関係節化させるほうが難易度が低いことになる。この仮説を検証した研究を、紹介する。

### 4.2 PDH の観点からの習得研究

L2 英語学習者を対象とした研究では、まず、Schumann (1980) がある。Schumann は、5 人の学習者の英語習得過程を 10 ヶ月に渡り観察し、使われた関係節のうち以下の 4 つのグループに入るものを取り出して分類した。

SS: 被修飾名詞が主節の主語であり、関係節の主語であるもの。

(例) The man who needed a job helped the woman.

SO: 被修飾名詞が主節の主語であり、関係節の目的語であるもの。

(例) The dog that the woman owns bit the cat.

OS: 被修飾名詞が主節の目的語であり、関係節の主語であるもの

(例) They saw the boy who entered the room.

OO: 被修飾名詞が主節の目的語であり、関係節の目的語であるもの

(例) A man bought the clock that the woman wanted.

(例文は、Hamilton 1994: 134 下線・斜字筆者)

その結果、5 人の学習者のうち 4 名は、4 種類の関係節の中で、OS と OO のタイプの関係節を、SS と SO よりも多く、また早くから使っていたことがわかった。また、残りの 1 人は、常に関係代名詞が

使われないという誤った形であるが、OS のタイプの関係節のみを使っていた。従って、すべての学習者が、被修飾名詞が主節の目的語である関係節のほうを早くから多く使っていたことになり、この結果は、PDH を指示するものだと言える。

しかし、Hansen-Strain & Strain (1989) が行った聴解テストでは、主節に埋め込まれる場所による違いは、観察されなかった。

日本語に関しては、まず、L2 習得に関するものではないが、内田 (1995) が、50 名の日本人小学生児童が1年生から6年生になるまでの間に書いた作文を、連体修飾節が主節中のどんな役割の語を修飾しているかという観点から、分析している。母語話者のデータではあるが、50 名を対象とした縦断的データという点で非常に貴重な、L2 習得研究からも参考になる調査だと言えよう。内田は、日本人児童の作文では、主節中の「主体（ガ格又は二格）」を修飾するものがどの学年でも多いこと、「直接対象（ヲ格又は二格）」を修飾するものがそれに次ぐことを報告している。

また、齋藤 (2001) の3名の学習者を対象とした縦断研究では、どの学習者も、連体修飾節の表出の見られる初期から、主節の主語を被修飾名詞とする連体修飾節を最も多く使っていることが観察された。さらに、主節の直接目的語として使う場合でも、「(被修飾名詞)は」の形でトピック化して文頭に使われることが多く観察された。つまり、全体的に、文頭での「連体修飾節+被修飾名詞+は～」の形での表出が多かったことになる。さらに、中国語母語の学習者を分析の対象に加えた Saito (2001)でも、同様の結果が得られた。

研究の数は少ないが、英語学習者と日本語学習者とは、異なった傾向の結果が得られており、Schumann (1980)の結果及び日本語学習者を対象とした結果は、PDH を支持するものとなっている。齋藤 (2001)、Saito (2001) の被修飾名詞がトピック化された形で文頭で使われていたという結果も、文頭で連体修飾節が使われやすいことが要因である可能性がある。また、三上 (1963)、久野 (1973) は、関係節化と提題化のプロセスには、なんらかの類似点があるのではないかと述べており、今後この点からの考察も必要だろう。

## 5. その他の観点からの関係節・連体修飾節に関す

### る習得研究

5節では、NPAH 及び PDH 以外の観点から行われた習得研究について概観する。まず、表出に関する研究、次に理解に関する研究を見ていく。

#### 5.1 表出に関する研究

表出を見た研究では、学習者の発話の中での連体修飾節の出現や使用頻度を見た研究、「の」の過剰生成に関する研究、意味的な観点からの研究、最後に、自然習得者の習得プロセスに関する研究という順で見ていく。

##### 5.1.1 連体修飾節の出現及び使用頻度

田丸他 (1993)、山本 (1996)、齋藤 (2001) は、複文構造全体の習得過程に関する調査の中で、連体修飾節の習得についても分析を行っている。いずれも口頭での表出を対象としている。

田丸他 (1993) は、6名の学習者のタスクやインタビューでの発話をデータとし、使用した文の長さや複雑さの長期的な変化の観察を行った。その結果、連体修飾節に関しては、練習を繰り返したにも関わらず、調査での発話に初めて出現したのは、早い学習者でも、その約1年後だったことを報告している。

山本 (1996) は、中級学習者のACTFL-OPI<sup>19</sup>のインタビュー・テープでの複文の分析を行い、連体修飾節のうち付加情報節（内の関係）の使用は、中級前期の学習者ではまだ少ないが、中級中期、後期にかけて急速に増加することを報告している。

齋藤 (2001) の初級学習者対象の縦断的観察では、自然習得をしてきた1名は早くから短い連体修飾節を使用していたが、教室学習中心の2名の発話では、連体修飾節の使用は非常に少なく、なかなか増えていかないことが観察されている。

また、名詞修飾表現全般を分析した柳田 (1999) は、初級学習者のインタビュー資料及び作文では、動詞による名詞修飾の産出は非常に少なかったと報告している。

Iwasaki (2000) は、英語を母語とする子どもの日本語学習者の発話を縦断的に観察しており、タスクによる誘出法を用いて口頭での連体修飾節の表出データを収集している。そのなかで、初めて連体修飾節の使用が観察されてから、正しい形が安定して使われるようになるまでには7ヶ月かかったと報告されている。

これらの研究から、連体修飾節は、導入後もなかなか口頭では使用されない、つまり知識があつて

もなかなか使えるようにならない形式だとういうことがわかる。柳田 (1999: 126) も、発話の中に現れてこないことを問題点として指摘し、「発話の中に名詞修飾を取り入れていくように促してやるのが大切」と述べている。しかし、どのように促せば学習者は連体修飾節を使うのであろうか。学習者の表出を効果的に促していくためには、学習者が初期の段階から使い易い連体修飾節がどんなものか、また、連体修飾節が使われ易い文脈、回避されにくい文脈を把握することが必要であり、それらを明らかにしていく研究が必要とされるだろう。

また、この使用の少なさの要因としては、回避 (avoidance) ということも考えられる。Schachter (1974) は、ペルシャ語・アラビア語・中国語・日本語を母語とする英語学習者の関係節に関する誤用分析を行っている。ペルシャ語とアラビア語は、英語と同様に名詞前方型の言語であり、中国語と日本語は名詞後方型の言語であるため、中国語・日本語母語話者のほうに多くの誤りが見られることが予想されたが、結果は、中国語・日本語母語話者のほうが誤りが少ないというものになった。しかし、また、ペルシャ語・アラビア語母語話者のほうが多くの関係節を使っていたこともわかった。このことについて、Schachter は、中国語・日本語母語話者が困難と考える形式の使用を回避したためと説明し、同時に誤用分析の問題点を指摘している。

日本語での関係節・連体修飾節の回避に関する研究は、今のところ行われていないが、母語別に使用頻度の比較を行った研究としては、齋藤 (印刷中) が ACTFL-OPI のインタビュー・テープでの初級から超級までの発話を分析し、英語・韓国語・中国語母語話者の比較を行っている。その結果、韓国語母語話者が最も低いレベルから連体修飾節の使用が見られ、またどのレベルでも、韓国語母語話者の使用頻度が、英語・中国語母語話者の使用頻度よりも高かったという結果を得ている。また、英語・中国語母語話者では上級になっても連体修飾節をあまり使用しない学習者が見られた。

韓国語母語話者の使用頻度が最も高いという結果は、一見納得のいくものではある。しかし、中国語も名詞後方型であり、中国語母語話者の使用頻度が高くなかったという結果には、名詞前方型か後方型かということ以外の要因を考えていかなければならない。また、Ellis (1994) が指摘しているように、

その形式が使われなかった原因が回避であるかどうかの判断は難しい。Ellis は、その形式が学習者の母語での使用が少ないために頻度が低くなる可能性があることも指摘している。

言語間での使用頻度の違いに関しては、Collier-Sanuki (1993)、Bates et al. (2001) で指摘されている。Collier-Sanuki は、同じ文章から英語と日本語に翻訳された文章を分析し、日本語では英語の2倍の関係節が使用されていることを報告している。Collier-Sanuki はさらに、日本語の関係節が使われた箇所と、英語の関係節が使われた箇所を比較し、一致したのは、日本語で関係節が使われている箇所の4分の1だけだったと述べており、英語と日本語では関係節の持つ機能が大きく異なることを指摘している。Bates et al. も、英語とイタリア語の比較であるが、イタリア語のほうが関係節が多く使用されると述べており、関係節の置かれる位置が同じ言語であっても、関係節の使われ方は言語によって異なっているようである。

なぜある形式の使用頻度が低いのかとすることに関しては、母語との詳細な比較が必要であると言えよう。

### 5.1.2 「ノ」の過剰生成

「ノ」の過剰生成とは、

(47) \*仕事をしているの人

のように、被修飾名詞の前に「ノ」を過剰に挿入してしまう誤りを指し、連体修飾節だけでなく、「名詞+名詞」「形容詞+名詞」などを含めた名詞修飾全般を対象にして研究が行われている。

「ノ」の過剰生成は、第一言語 (以下 L1) 習得においても観察されることが報告されている (Harada 1984; Clancy 1985; 横山 1990 等)。L1 習得でなぜこのような現象が起こるかについては、「名詞+ノ+名詞」の格助詞の「ノ」が、過剰に適用された結果という見方をする研究者が多い (Clancy 1985; 白畑 1993; 内田 1999 等) ようだが、まだ一致した見解は見られていない。

L2 習得に関しては、白畑 (1993, 1994) が縦断研究を行っている。白畑 (1993) では韓国語を母語とする幼児1名の11ヶ月にわたる調査のなかで、「形容詞+ノ+名詞」という「ノ」の過剰生成が観察されている。連体修飾節にあたる「動詞+ノ+名詞」については、白畑 (1993) では言及されていないが、白畑 (1994) で、この幼児にも1度だけ観察された

と述べられている。白畑（1993）は、この幼児の「ノ」の過剰生成について、母語である韓国語との対比から、母語の影響による誤りではないだろうと述べている。

また、白畑（1994）では、成人のタイ語母語話者とマレー語母語話者1名ずつの縦断研究の結果が報告されており、やはりどちらの学習者にも、「ノ」の過剰生成が観察されている。「動詞+ノ+名詞」の形も観察機関終了時まで観察されているが、「ノ」が挿入されない正しい形も並行して使われていた。白畑は、タイ語母語話者・マレー語母語話者についても、母語との対比から、「ノ」の過剰生成は母語の影響によるものとは言えないとしている。

齋藤（2001, 2002）、Iwasaki（2000）は、「ノ」の過剰生成に焦点を当てた研究ではないが、連体修飾節に過剰生成が観察されたことが報告されている。

齋藤（2001）は、自然習得中心のロシア語母語話者、教室内学習中心のマラティ語母語話者、テルグ語母語話者を対象としているが、どの学習者の発話した連体修飾節にも、「ノ」が挿入されない正しい形と並行して、過剰生成も数回ずつ観察された。また、ロシア語母語話者の場合、「形容詞+ノ+名詞」の過剰生成は多く観察され、むしろ連体修飾節での過剰生成のほうが少なかった。

齋藤（2002）では、自然習得のフィリピン人女性の発話を、また、Iwasaki（2000）では、英語を母語とする幼児の発話を分析しているが、どちらの発話にも、連体修飾節における「ノ」の過剰生成が観察されている。

以上のように、「ノ」の過剰生成は、L1 習得でも観察され、L2 習得においても様々な母語を持つ学習者に観察されている。

この「ノ」の過剰生成に関しては、中国語の「的」が日本語の「ノ」と似た使われ方をするため、中国語母語話者の場合は母語の影響によるとも考えられる。鈴木（1978：158）では、「明らかに母語の干渉によることはまちがいない」と明記されている。筆者も経験的には、中国語母語話者にこの誤りが多いと感じている。しかし、実際に中国語母語話者のデータを分析した調査は今のところ報告されていないようである。先行研究の結果は、「ノ」の過剰生成には母語の影響以外の要因があることを示していると言えるが、母語の影響で過剰生成の頻度が高かったり長く残ったりする可能性も考えられるだろう。

今後、母語の異なる学習者間の比較を行っていくことが必要である<sup>20</sup>。

### 5.1.3 意味的な観点からの研究

ここまで概観した研究は、連体修飾節の構造的な観点からの習得研究がほとんどであった。意味的な観点からの習得研究は非常に少ないが、増田（2000, 2001）が挙げられる。増田は、漫画のストーリーを説明する文章を書くタスクを使って、中級及び上級学習者の口頭で表出された連体修飾節の分析を行っている。

増田（2000）は、連体修飾節の述語が主節時と時間差があるかという観点から分析を行い、時間差のない連体修飾節のほうが習得されやすいという結果を得ている。次の例の（48）が「時間差なし」で、（49）が「時間差あり」の連体修飾節である。

（48）男の人は、だまってただ目の前にあるごはんを食べるだけでした。

（49）こっそりドアを開いてお母さんがカレンダーにつけたまるを目にした。

（同上：204 下線原文）

増田はさらに、「時間差なし」の中でも、「玄関に置いてあるかさ」「電話で話している男の人」のような「主名詞のありよう（当該時・当該場所の様子）」（同上：206）を表す連体修飾節が使われやすいとしている。したがって、日本語教育の現場でも、「これはミラーさんが作ったケーキです」（時間差あり・既実現の行為）と「これは紙を切るナイフです」（時間超越的・一般的属性(用途)）のような文よりも、「勉強している学生はリーさんです」（時間差なし・当該時のありよう）のようなタイプのものを先に導入することを提案している（同上：206）。

連体修飾節のような複雑な構造の習得には、意味的・認知的、また機能面の影響も十分考えられるため、構造的な観点以外からの研究は大きな意義があると考えられる。ただし、導入の順序に関しては、NPAH に関して議論されているように、本当に、易しいものから先に導入すべきなのかどうかという問題も考えていかなければならない（Shirai 1997）。

さらに、増田（2000：207）は、「時間超越的（一般的属性（用途）」）のタイプを学習しにくいとしたことに関しては、「主名詞のありよう」とは一線を画するタイプのものであり、その点から、あまり学習しやすいとはいえない連体節だと推測される」と述べており、これについては、増田自身も課題とし

ているように、今後検証が必要であろう。

また、増田 (2000, 2001) は、非限定用法の使用に関しても興味深い報告をしている。増田によると、ストーリーの説明のタスクの中で、母語話者が、

(50) 怒った親は、子どもをしかった。

のような非限定用法の連体修飾節を使う場合に、日本語学習者は、

(51) 親は怒った。そして、子どもをしかった。のように接続詞で繋いでいくことを指摘している。

そして、(50) のような連体修飾節を、「談話展開型連体節」(増田 2001 : 50) と呼び、このような機能の非限定用法を日本語学習者 (母語は様々) は上級の学生でもほとんど使用しなかったことを報告している。増田の研究は、現在のところ非限定用法の習得に関するただひとつの研究であり、この結果は興味深いものである。このような、談話レベルでの習得研究は、まだほとんど行われておらず、今後必要とされる分野であろう。また、前述の使用頻度の低さの要因を明らかにしていくためにも、このような研究が必要だと考えられる。

また、非限定用法に関しては、Collier-Sanuki (1993)、コーリヤ佐貫 (1999a) が、英語と日本語とのディスコースにおける機能の違いを指摘している。コーリヤ佐貫 (1999a) は、

(52) a. On my way here I met Mr. Abe , who told me the news.

b. ここへ来る途中で阿部さんに会ったところ、阿部さんが私にそのことを教えてくれた。

という例を挙げ、a の修飾節の内容 (Mr. Abe told me the news.) は、主節 (I met Mr. Abe) の後に起きていることを表しているが、このような場合、修飾節が先行する日本語では連体修飾節では表現できず、b のような接続形式で表すことになると述べている。「私にそのことを教えてくれた阿部さんに会った」では、「そのことを教えてくれた」のは、「阿部さんに会う」前の出来事に解釈されてしまう。Collier-Sanuki (1993) も、修飾節が先行する日本語では、非制限用法は主節の出来事より前に起きたことを表し易く、英語ではその逆になることを指摘している。このような機能の違いは、日本語学習者の連体修飾節の使用に影響を与えている可能性は十分考えられ、今後習得研究に取り入れていきたい観点である。

#### 5.1.4 自然習得者の習得プロセスに関する研究

ここまでの研究は、日本語学習者がどのように連体修飾節を使用しているか、また、どのような連体修飾節が難しく、またどのようなものが易しいか、ということを見てきたものが中心であったが、齋藤 (2002) の研究は、自然習得環境にいる学習者がインプットの中から連体修飾節の形式にどう気づき、どのようなプロセスで習得していくか、という習得プロセスを考察した研究である。

齋藤は、自然習得を2年間してきた後にインストラクションを受け始めた学習者 (ロシア人女性1名) を対象にした縦断研究での発話データと、自然習得者 (フィリピン人女性5名) へのインタビュー資料を、形容詞的な連体修飾節という観点から分類した。

形容詞的な連体修飾節に関しては、「～タ」を含む連体修飾節がどのような条件のもとで「形容詞的」な意味に解釈されるかを中心に、文法研究の分野で多くの研究者に論じられている (寺村 1984, 金水 1994, 影山 1996, 稲垣 1998 等)。まだ一致した見解が出ているとは言えないが、動作主がないもの (例: ゆでた卵、非時制的であるものを形容詞的とする部分では、ほぼ一致している。

稲垣 (1998 : 102) は、先行研究を踏まえ、「形容詞的」という語に関して「動作主の存在が意識されないある動きを背景にした変化結果の状態を表し、時間性から離れていて非時制的である」と定義し、「昨日死んだ猫」「父が塗った壁」のように時間や動作主が明言されると動詞的解釈になるとしている (下線原文)。

齋藤 (2002) では、「タ形」以外でも「食べる物 (=食べ物)」「身につける物」等も「非時制的」「動作主なし」という条件を満たすと考えられること、また、どの研究も、「形容詞的」か「動詞的」か、という二項対立的であることから、習得研究においては「タ形」以外のものも含めた、より連続的な枠組みが必要とされると提案している。そして、学習者の使用する連体修飾節の「形容詞性」を探る手始めとして、「非時制的」「動作主なし」(被修飾名詞が動作主である場合を除く) のものを最も形容詞的な連体修飾節とし、テンス・アスペクトの観点から分類を行った。分類の基準は図1のとおりである。

分析の結果、自然習得者及び自然習得中心の学習



日本語の連体修飾節は、本稿でも述べたように、格関係が明示されず、さらに統語的には説明の難しい意味的なつながりで成り立っているものも多く、語彙の意味特性や言語外知識を活用して解釈していく必要性が指摘されている (Matsumoto 1997 他)。Comrie (1989 山本・松本訳 1992: 163) も、空所型の関係節の解釈には、「現実世界に関する知識にたよる」などの方略が援用されると述べている。この特徴は、日本語学習者の意味理解にどのような影響を与えているのか、また、日本語学習者が何を手がかりに連体修飾節を理解していくのか、どのような連体修飾節の理解が難しいのか、これらに関する研究はまだ非常に少数である。今後の研究が必要とされる分野であろう。

## 6 まとめ

本稿では、L2 日本語学習者の連体修飾節の習得に関する研究と、あわせて欧米での関係節習得に関する研究を、概観してきた。

これまで見てきたように、日本語の連体修飾節習得に関する研究は、まだ非常に少なく、ほとんどが記述的研究であり、特にインストラクションを絡めた実験研究は全く行なわれていない。しかし、日本語の連体修飾節は、前述のように、英語等のヨーロッパ言語の関係節とはかなり異なった特徴を持っており、欧米 (特に英語による) の研究結果をそのまま当てはめることは難しい。普遍性をもとにした仮説に関しては、欧米での研究の結果を踏まえた上での日本語での研究がより多く必要とされており、また、日本語特有の特徴に基づいた、日本語の連体修飾節研究独自の枠組みによる研究も必要であると言える。

日本語の連体修飾節特有の習得しやすい点、しにくい点を明らかにし、さらに、インストラクションの効果を絡めた実証的研究をしていくこと、また、機能面、認知面、文脈までも含めた研究、そして、理解の面からの研究が、今後求められていくだろう。

## 謝辞

本稿の執筆にあたっては、コーネル大学の白井恭弘先生から貴重な御助言を賜りました。この場をお借りして、感謝の意を申し上げます。

## 注

1. 関係節マーカーの例としては、中国語の「的」が挙げられる。「的」は、「我看的書」(私が読んだ本)のように関係節と被修飾名詞の間に置かれ、「的」に先行する部分が修飾節であることを示す役割を果たす。ただし、「我的書」(私の本)のように、「的」は名詞で名詞を修飾する場合にも使用され、日本語の「の」に近いものである。
2. 前置詞(preposition)と後置詞(postposition)を包括する用語であり、英語の adposition に当たる。(角田 1991)
3. Keenan & Comrie (1977) によれば、ヘブライ語では主語の関係節化以外ではすべて代名詞の残留がおこる。
4. 日本語の場合、「その本」「その人」「自分」等を代名詞と呼ぶことは適当はないため、「代名詞等」という表現を用いる。
5. 英語での略語が表すものは、それぞれ次のとおりである。  
SU: subject DO: direct object  
IO: indirect object OP: object of preposition  
GEN: genitive OCOMP: object of comparison
6. Keenan & Comrie (1977) によれば、主語しか関係節化できない言語も存在する (マオリ語、タガログ語など)。
7. Keenan & Comrie (1977) は、日本語での比較級の目的格の関係節化については「？」をつけているが、井上 (1976) は、関係節化されないとしている。
8. 頻度に関しては、Keenan (1975) での英語の文章の調査で、NPAH に沿った使用頻度が報告されている。しかし、Fox (1987) は、口頭での会話データを分析し、主語の関係節化と直接目的語の関係節化の現れた頻度が、1:1 だったことを報告している。さらに、使用された関係節の多くが、被修飾名詞が関係節の主語にあたり、かつ関係節内の動詞が自動詞であるもの (S-relative) と、被修飾名詞が直接目的語であるもの (P-relative) であったことから、NPAH の左端にくるのは、S-relative と P-relative という仮説を立てている (Absolutive Hypothesis; 絶対格仮説)。
9. Zobl (1983) は、Projection model の中で、有標な形式のインプットにさらされれば、それと関連する、より無標な形式の習得につながるという仮説を立てている。
10. 4.2 で概観するいくつかの研究でも、所有格の関係節化に関しては、Gass と同様の結果が出ている。
11. 後述する Hyltenstam (1984) が使用した誘出法に倣ったものである。
12. 読んだり聞いたりした内容を、学習者に再生させる方法である。Hansen-Strain & Strain (1989) は、読んだ内容を再生させる方法をとっている。
13. 間接目的格の関係節化は、前置詞の目的格に含める形で、テストに入られている。
14. Croteau によると、イタリア語の所有格の関係節化では、関係代名詞の前に、定冠詞を置かなければならない。

15. 文主語からの関係節化とは次の例のようなものである。
- a ジョンがその会議に来なかったことがばれた。
  - b ジョンが来なかったことがばれた会議。
- また、関係節からの関係節化とは次の例のようなものである。
- c その学者の書いた本がこの書店に出ている。
  - d 書いた本がこの書店に出ている学者。
- (例文 a~d 井上 1976)
16. 奥津、寺村らも、格助詞による連体修飾節の被修飾名詞にできるかどうかという制限については触れているが、順位づけなどは行っていない。
17. 同じ「と」でも、「～と結婚する」「～と争う」のような、相手を表す「と」であれば、「彼が結婚した人」のように、そのまま関係節にできる。
18. Keenan の調査は、英語母語話者の書いた英語の文章のみが対象である。
19. OPI (Oral Proficiency Interview) は、ACTFL (American Council on the Teaching of Foreign Languages) が作成した口頭運用能力測定のためのテストである。
20. 未報告ではあるが、齋藤 (印刷中) で扱った OPI のデータでは、「ノ」の過剰生成の頻度は、英語母語話者、韓国語母語話者と比べ中国語母語話者が最も高く、また、レベルが低い学習者で頻度が高かった。この結果については、機会を改めて報告したい。

## 参考文献

- 稲垣頸子 (1998) 「V(動詞)+た」の連体修飾節における形容詞的用法について『日本語・日本文化研究』8, 大阪外国語大学日本語講座 101-109.
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語 上』大修館書店
- 内田安伊子 (1995) 「児童の作文に見られる連体修飾節について 一文中のどのような語を修飾しているか」『言語文化と日本語教育』10, 37-49.
- 内田伸子 (1999) 『発達心理学—ことばの獲得と教育—』岩波書店
- 大島資生 (1991) 「連体修飾構造に現れる「という」の機能について」『東京都立大学人文学部人文学報』225, 27-58.
- 小熊利江・品川直美・山下直子・米沢久美子 (1998) 「連体修飾の使用状況に関する一考察」『言語文化と日本語教育』16, 70-79
- 小野寺美智子 (1995) 「日本語関係節構文の語用論的分析」『拓殖大学日本語紀要』5, 20-32.
- 奥津敬一郎 (1974) 『生成日本文法論』大修館書店
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点—』くろしお出版
- 加藤重広 (1999) 「日本語関係節の成立要件 (1) —先行研究の整理とその問題点—」『富山大学人文学部紀要』30, 65-111.
- 加藤重広 (2000) 「日本語関係節の成立要件 (2) —文法論的要因と語用論的要因—」『富山大学人文学部紀要』31, 71-156.
- 川村統俊 (1996) 「作文における名詞修飾節の使用と学習者の能力とについての考察 —トルコ人の学習者の場合—」『創価大学別科紀要』10, 75-92.
- 金銀叔 (1989) 「連体修飾構造における「という」の意味機能」『国語学研究』29, 21-34.
- 金水敏 (1994) 「連体修飾の「た」について」田窪行則編『日本語の名詞修飾表現』くろしお出版 29-65.
- 久野暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
- 窪田彩子 (1997) 「日本語の関係節の習得について—作文資料とアンケート調査を通して—」『日本語教育学会春季大会予稿集』196-201.
- ユーリヤ佐貫葉子 (1999a) 「日本語連体節における限定／非限定」『言語学と日本語教育 実用的言語理論の構築を目指して』くろしお出版 275-290.
- ユーリヤ佐貫葉子 (1999b) 「属性概念語としての日本語連体節」『日本語学・日本語教育論集』6, 名古屋学院大学留学生別科 1-20.
- 齋藤浩美 (2001) 「初級日本語学習者の複文構造の習得過程に関する縦断的研究」お茶の水女子大学修士論文
- 齋藤浩美 (2002) 「自然習得中心の学習者における連体修飾節の習得過程 —NPAH 及び状態性の観点から—」『第二言語としての日本語の自然習得の可能性と限界 平成 12.13 年度科学研究費補助金研究 萌芽的研究 課題番号 12878043』お茶の水女子大学 88-101.
- 齋藤浩美 (印刷中) 「日本語学習者の連体修飾節習得に関する一考察 —修飾節の状態性の観点から—」『2002 年度日本語教育学会春季大会予稿集』
- 坂本正・窪田彩子 (2000) 「日本語の関係節の習得について」『南山大学国際教育センター紀要』1, 114-126.
- 鹿浦佳子 (1991) 「日本語の話しことばにおける連体修飾節についての考察」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』1, 51-67.
- 白川博之 (1986) 「連体修飾節の状況提示機能」『言語学論叢』5, 筑波大学文芸言語研究科 1-16.
- 白畑知彦 (1993) 「幼児の第 2 言語としての日本語獲得と「ノ」の過剰生成」『日本語教育』81, 104-115.
- 白畑知彦 (1994) 「成人第 2 言語学習者の日本語の連体修飾構造獲得過程における誤りの分類」『静岡大学教育学部研究報告 人文・社会科学篇』44, 175-189.
- 鈴木忍 (1978) 『教師用日本語教育ハンドブック③ 文法 I』国際交流基金日本語国際センター
- 高野志野 (1997) 「連体修飾構造における「任意のトイウ」の出現条件の一例 —ドラマティック効果について—」『日本語学・日本語教育論集』4, 名古屋学院大学留学生別科 91-110.
- 田窪行則編 (1997) 『日本語の名詞修飾表現』くろしお出版
- 田丸淑子・吉岡薫・木村静子 (1993) 「学習者の発話に見られる文構造の長期的観察」『日本語教育』81, 43-54.
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 寺村秀夫 (1975) 「連体修飾のシンタクスとその意味 —その 1—」『日本語・日本文化』4, 大阪外国語大学

- 留学生別科 (寺村秀夫 (1993) 157-207 に再録)
- 寺村秀夫 (1977a) 「連体修飾のシンタクスとその意味 — その 2—」『日本語・日本文化』5, 大阪外国語大学留学生別科 (寺村秀夫 (1993) 209-260 に再録)
- 寺村秀夫 (1977b) 「連体修飾のシンタクスとその意味 — その 3—」『日本語・日本文化』6, 大阪外国語大学留学生別科 (寺村秀夫 (1993) 261-296 に再録)
- 寺村秀夫 (1978) 「連体修飾のシンタクスとその意味 — その 4—」『日本語・日本文化』7, 大阪外国語大学留学生別科 (寺村秀夫 (1993) 297-320 に再録)
- 寺村秀夫(1980) 「名詞修飾部の比較」國廣哲彌編『日英語比較講座—文法二』大修館書店 221-260.
- 寺村秀夫 (1981) 『日本語の文法 (下)』 国立国語研究所
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
- 寺村秀夫 (1987) 「聴き取りにおける予測能力と文法的知識」『日本語学』6/3, 56-68.
- 寺村秀夫 (1993) 『寺村秀夫論文集 I — 日本語文法編—』くろしお出版
- 中島孝幸 (1990) 「「という」の機能について」『阪大日本語研究』2, 43-53.
- 仁田義雄編 (1995) 『複文の研究』くろしお出版
- 益岡隆志 (1997) 『新日本語文法選書 2 複文』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版
- 増田真理子 (2000) 「学習者はどのような連体修飾節を使っているか — 日本語学習者が産出したテキストの分析から—」『日本語教育学会秋季大会予稿集』202-207.
- 増田真理子 (2001) 「〈談話展開型連体節〉 — 「怒った親は子どもをしかった」という言い方—」『日本語教育』109, 50-59.
- 松本善子 (1993) 「日本語名詞句構造の語用論的考察」『日本語学』12/12, 101-114.
- 松本善子 (1994) 「意味から見た連体修飾のいろいろ」『月刊言語』23/9, 124-127
- 三上章 (1963) 『日本語の構文』くろしお出版
- 柳田恵里子 (1999) 「初級日本語学習者に見られる名詞修飾表現 — その問題点と指導上の提言—」『熊本大学留学生センター紀要』3, 1-12.
- 山中恵美 (1999) 「日本語の名詞修飾節の構造と第 2 言語学習者」今田滋子先生退官記念論文集刊行委員会編『日本語教育の交差点で: 今田滋子先生退官記念論文集』126-137.
- 山本真知子 (1996) 「中級学習者の複文の習得—OPI テープの分析から—」『日本語・日本文化研究』4, 京都外国語大学留学生別科 61-70.
- 横山正幸 (1990) 「幼児の連体修飾発話における助詞「ノ」の誤用」『発達心理学研究』1/1, 2-9.
- Aarts, F. & Erik, S. (1995) Relative clauses, the accessibility hierarchy and the contrastive hypothesis, *International Review of Applied Linguistics*, 33, 47-63.
- Bates, E., Devescovi, A. & Wulfeck, B. (2001) Psycholinguistics: A cross-language perspective. *Annual Review of Psycholinguistics*. 52, 369-396.
- Clancy, P. (1985) The acquisition of Japanese, In D. I. Slobin (Ed.) *The Crosslinguistic study of language acquisition, Vol. 1*, Hillsdale, NJ: Lawrence Elbaum Associates, 373-524.
- Collier-Sanuki, Y. (1993) Relative clauses and discourse strategies, *Japanese / Korean Linguistics*, 3, 54-66.
- Comrie, B. (1989) *Language universals and linguistic typology: Syntax and morphology*, Oxford: Blackwell. (松本克巳・山本秀樹訳 1992 『言語普遍性と言語類型論』ひつじ書房)
- Croteau, K. C. (1995) Second language acquisition of relative clause structures by learners of Italian, In F. R. Eckman, D. Highland, P. W. Lee, J. Mileham & R. R. Weber (Eds.), *Second language acquisition theory and pedagogy*, Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, 115-128.
- Doughty, C. (1991) Second Language instruction does make a difference: Evidence from an empirical study of SL relativization, *Studies in Second Language Acquisition*, 13, 431-469.
- Eckman, F., Bell, L. & Nelson, D. (1988) On the generalization of relative clause instruction in the acquisition of English as a second language, *Applied Linguistics*, 9, 1-20.
- Ellis, R. (1985) *Understanding second language acquisition*, Oxford: Oxford University Press.
- Ellis, R. (1994) *The study of second language acquisition*, Oxford: Oxford University Press.
- Fox, B. A. (1987) The noun phrase accessibility hierarchy reinterpreted: Subject primacy or the absolutive hypothesis? *Language*, 63, 856-870.
- Gass, S. (1979) Language transfer and universal grammatical relations, *Language Learning*, 29, 327-344.
- Gass, S. (1982) From theory to practice, In M. Hines & W. Rutherford (Eds.), *On TESOL '81: Selected Papers of the Fifteenth Annual Conference of Teachers of English to Speakers of Other Languages*, Washington, D. C.: TESOL, 129-139.
- Hamilton, R. L. (1994) Is implicational generalization unidirectional and maximal? Evidence from relativization instruction in a second language, *Language Learning*, 44, 123-157.
- Hamilton, R. L. (1995) The Noun Phrase Accessibility Hierarchy in SLA: Determining the basis for its developmental effects, In F. R. Eckman, D. Highland, P. W. Lee, J. Mileham & R. R. Weber (Eds.), *Second language acquisition theory and pedagogy*, Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, 101-113.
- Hansen-Strain, L. & Strain, J. E. (1989) Variation in the relative

- clause of Japanese learners, *JALT Journal*, 11, 211-237.
- Harada, Kazuko. (1984) On the acquisition of Japanese. 『金城学院大学論集・英米文学篇』 25, 149-171.
- Hawkins, R. (1989) Do second language learners acquire restrictive relative clauses on the basis of relational or configurational information? The acquisition of French subject, direct object and genitive restrictive relative clauses by second language learners, *Second Language Research*, 5, 158-188.
- Hyltenstam, K. (1984) The use of typological markedness conditions as predictors in second language acquisition; The case of pronominal copies in relative clauses, In R. D. Andersen (Ed.) *Second languages: A cross-linguistic perspective*, Rowley, MA: Newbury House Publishers, 39-60.
- Iwasaki, J. (2000) The acquisition of relative clause (sentential modifiers) in Japanese as a second language (JSL) by a young child, 『第 11 回第二言語習得研究会全国大会予稿集』 60-67.
- Jones, A. (1991) Generalization in the acquisition of relative clauses in English, *The Faculty of Letters of Jissen Women's University Annual Reports of Studies*, 33, 1-39.
- Jones, A. (1993) Relatively speaking, *The Faculty of Letters of Jissen Women's University Annual Reports of Studies*, 35, 59-97.
- Kanno, K. (2000) Sentence processing by JSL learners. Paper for SLRF 2000, Madison: WI, September 2000.
- Keenan, E. (1975) Variation in universal grammar, In R. Fasold & R. Shuy (Eds.), *Analyzing variation in language*, Washington, D.C.: Georgetown University Press, 136-148.
- Keenan, E. & Comrie, B. (1977) Noun phrase accessibility and universal grammar, *Linguistic Inquiry*, 8, 63-99.
- Kuno, S. (1974) The position of relative clauses and conjunctions, *Linguistic Inquiry*, 5, 117-136.
- Matsumoto, Y. (1997) *Noun-modifying constructions in Japanese: A frame-semantic approach*, Amsterdam; Philadelphia, PA: J. Benjamins.
- Maynard, Senko. (1993) Discourse Modality: Subjectivity, emotion and voice in the Japanese language, *Pragmatics & Beyond New Series*, 24, Amsterdam: John Benjamins.
- O'grady, W. (1999) Toward a new nativism, *Studies in Second Language Acquisition*, 21, 621-633.
- O'grady, W. (2000) A linguistic approach to the study of language acquisition, Keynote address given to the annual meeting of the Pan-Pacific Association of Applied Linguistics [Electronic version ], Honolulu : Hawaii, July 2000.
- O'grady, W., Yamashita, Y., Lee, M., Choo, M. & Cho, S. (2000) Computational factors in the acquisition of relative clauses, Keynote address given to the International Conference on the Development of the Mind [ Electronic version ], Keio University : Tokyo, August 2000.
- Pavesi, M. (1986) Markedness, discoursal models, and relative clause formation in a formal and informal context, *Studies in Second Language Acquisition*, 8, 38-55.
- Sadighi, F. (1994) The acquisition of English restrictive relative clauses by Chinese, Japanese, and Korean adult native speakers, *International Review of Applied Linguistics*, 32, 141-153.
- Saito, H. (2001) A Longitudinal study of the acquisition of Japanese relative clauses: natural acquisition vs. classroom learning, *Paper for The JSAA Biennial Conference 2001*: Sydney
- Schachter, J. (1974) An error in error analysis, *Language Learning*, 27, 205-214.
- Schumann, J. H. (1980) The acquisition of English relative clauses by second language learners. In R. C. Scarcella & S. Krashen (Eds.), *Research in Second Language Acquisition: Selected Papers of the Los Angeles Second Language Acquisition Research Forum*, Rowley, MA: Newbury House, 118-131.
- Shirai, Y. (1997) Linguistic theory and research: Implications for second language teaching, In G.R. Tucker & D. Corson (Eds.), *The encyclopedia of language and education, Vol. 4: Second language education*, Dordrecht, MA: Kluwer Academic, 1-9.
- Tarallo, F. & Myhill, J. (1983) Interference and natural language in second language acquisition, *Language Learning*, 33, 55-76.
- Wolfe-Quintero, K. (1992) Learnability and the acquisition of extraction in relative clauses and wh-questions, *Studies in Second Language Acquisition*, 14, 39-70.
- Yamashita, H., Stowe, L. & Nakayama, M. (1993) Processing of Japanese relative clause constructions, *Japanese/Korean Linguistics*, 2, 248-263.
- Zobl, H. (1983) Markedness and the projection problem, *Language Learning*, 33, 293-313.

# Second language acquisition research on Japanese noun modifying Clauses

SAITO Hiromi

## Abstract

This paper reviews studies on the acquisition of noun modifying clauses by second language learners of Japanese. First it briefly summarizes the basic characteristics of Japanese noun modifying clauses, and then it reviews studies on SLA regarding two hypotheses thought to be universal. One hypothesis is based on Noun Phrase Accessibility Hierarchy (NPAH), an implicational hierarchy of grammatical relations between relative clauses and their head nouns. The other is Perceptual Difficulty Hypothesis, which predicts that center-embedded relative clauses are most difficult. However, very few studies have been made on the acquisition of Japanese with regard to these issues, so I discuss them comparing with studies made on languages other than Japanese. Especially, regarding NPAH, I point out how the results of studies on Japanese acquisition can contribute to examining universality of the hypotheses and what problems exist in analyzing Japanese relative clauses with NPAH. Next, I review studies from several other viewpoints, which are on frequency of noun modifying clauses, overuse of “no”, semantic aspects, acquisition process of learners in natural settings and comprehension of noun modifying clauses. As few studies have been done in each area, these results will not lead us to a certain conclusion. So by reviewing these studies I would like to propose necessary further research.

【Keywords】 second language acquisition, noun modifying clauses, relative clauses,  
Noun Phrase Accessibility Hierarchy

(Department of Applied Japanese Linguistics, Graduate School, Ochanomizu University)